ようやくここに立てました。本当にうれしいです。最後にここに来たのはわたしが高校三年生のとき、第 27 回だったと思います。今年が第 38 回。もう 11 年前のことなんですね。

まずは、きょうここに集まっている受賞校、受賞者の皆様、本当におめでとうございます。自分の頭の中にあるものを文章として書きだし、それを完結させて、作品として評価される、すべて大仕事です。みなさん本当にお疲れ様でした。

でも、いまここに座っている人の中には、もしかすると、受賞はしたものの、もっといい賞が取りたかったと悔しい思いをしている人もいるかもしれません。そもそも、今日この限られた席に座ることができず、悔しい思いをしているこの場に居ない人もたくさんいると思います。なぜそんなことを言うのか。11 年前、わたしはこの場所で、人生でいちばん悔しい思いをしたからです。

11 年前、わたしは盛岡三高の文芸部に所属して、三年間、ずっと書くことばかり考えていました。今思えばもしかすると、書くことよりも、賞を取ることを考えていたかもしれません。三年生のとき、わたしは詩部門と、短歌部門と、小説部門で、優秀賞を取りました。三部門で受賞できるなんて、本当にありがたいことです。でも、そのときのわたしにとっては、それじゃあだめだったのです。どうしても、一位が取りたかった。最優秀賞が取りたかった。三年生、最後のチャンス。三部門のすべてで、そのいちばん高いところに手が届かなかった時、わたしは本当に悔しかったんです。

この表彰式では、各部門の最優秀賞の人たちにスピーチの時間がありますよね。わたし、どうしてもあのスピーチをやりたかったんです。この授賞式には 2 年生のときと 3 年生のときに来ているのですが、そのどちらとも、スピーチでここに立つことができなかった。どれもとても自信のある作品でした。どうして最優秀賞が自分ではなくてこの人なんだろう、とあまりの悔しさに、最優秀賞の生徒が前に立って話すのを、ずっと睨んでいたことをいまでも思い出せます。そして、盛岡まで帰る新幹線の中でわたしはずっと恩師である顧問の先生に「わたしの作品のほうが絶対によかったですよね」と、あきらめきれずにまだそんなことを言っていました。だからきょう、睨みつけるほどずっと話したかったこの場所で、1 時間という時間をいただいて話せることが、わたしの人生において本当にありがたく、感慨深いです。

高校文芸から作家になる、という題で今日はお話をさせていただきます。自分で決めておきながら、とっても荷が重いタイトルではありますが、思い切って付けました。わたしが文芸部だったとき、作家になる方法を教えてくれる人はいませんでした。ましてや、高校文芸部から作家になる方法を教えてもらえる機会なんてなかったからです。

わたしは随分「高校文芸」というものについて、在学中も、卒業してからもたくさん考え、悩みました。「高校文芸」と呼ばれるものは一体何なのか、わたしがあれほどほしかった賞は、なんだったのか。高校文芸で賞を取るための努力は、卒業したあと、これから先に書き続けようとするときに全くどこにも当てはまらないルールだったような気がしてきて、すっかりからだが灰になるような気持ちになったこともありました。

だって、おかしいと思いませんか？ことしもこの文芸コンクールに 2800 人も応募しているんです。高校生で書きたいと思ってそれを作品にする人がこんなにいるのに、それから作家としてその後も書き続けている人があまりにも少ないような気がするのです。もしかしたら、作家の中に進んで「元文芸部員だった」と公表していないひとがたくさんいるだけなのかもしれないけれど、でも、それでも少ないような気がします。
野球ってあんまり好きじゃないので、野球で喩えるのってもっと好きじゃないんですが、でも、プロ野球は甲子園で活躍した高校からどんどん選手が排出されますよね。ドラフトもあって、強豪校の有名な選手は高校を出たあとそのままプロ野球選手になるチャンスがあります。わたしはきっと、この全国高校生文芸コンクールが、野球部における甲子園のようなものだと信じて、毎年がんばって作品を書いていたのだと思います。だから、いざ作家になってみて、周りを見渡せば文芸部出身の人のほうがとても珍しい存在だという事実に、とてもびっくりするし、さみしくなるんです。もしかして「高校文芸」って、大人になって本を出す人たちがやっている「文学」とはぜんぜん違う競技だったのか？って。
わたしたちはこんなに、十代の熱意を注いでがんばって書いてきたじゃないですか。そして、どれだけ書いても上がいるって思うくらい、とても良い作品がたくさん生まれているじゃないですか。それが、卒業した後全く通用しないものだとしたら、ちょっと、困りますよね。

結論から言うと、高校文芸コンクールに一生懸命取り組んでいるみなさんは、ちゃんと、卒業した後も大活躍するすばらしい力を手にしていますから、大丈夫です。ただ、その一方で、高校文芸コンクールがすべてではありません。この賞は、高校生のみなさんの背中を押すためだけにあり、賞を取れなかったことは、ほんとうに、たまたまその時その場ではそうだったというだけです。高校文芸コンクールの審査員は、出版社の編集さんではありません。だから、残念ながら、ここで最優秀賞を取ったり、たくさん賞を取ったところで、そのまま作家として食っていける道へ続いているわけではありません。でも、じゃあ、その道ってこの先で、誰が教えてくれるんでしょう。

だから今日は、卒業して「元文芸部」になってから、みなさんのすこし先を歩いてたまたま作家になることができたひとりの目線から、「高校文芸」で得られたこと、と、「作家になる」ってどういうことなんだろう、ということについて、お話ししようと思っています。もちろん、目の前の、いま、高校生の皆さんに向けてお話しするつもりですが、審査する側である

先生方や、生徒のサポートをしている顧問の皆さんに向けてもお話ししますし、何よりもきょうは、あのときその辺に座って演台を睨みつけていた 11 年前のわたしに向けて、29 歳のわたしがお話をしたいと思っています。

まずは、わたしの話をします。
わたしは 1994 年生まれで、いま 29 歳です。岩手県の出身で、いまも盛岡市に住みながら、東京の出版社さんたちと仕事をしています。
渋民小学校、渋民中学校という、おもいっきり石川啄木のふるさとの学校にいて、冬は百人一首ではなく、啄木かるた、というのをやらされました。
高校は盛岡三高に入り、最初は剣道部に入りました。本当は最初から文芸部に入るつもりだったのですが、部活見学のときの先輩たちのオタクっぽさに慄いてしまい、その反動のようにかっこよさそうという理由で剣道部に入って 3 か月で辞め、おとなしく文芸部に入りなおしました。
そこからは詩、俳句、短歌、小説、随筆、戯曲、児童文学、という文学研究以外のすべてのジャンルの作品を書いてたくさん応募しました。

高校を卒業すると宮城県の大学に進学しました。文学部ではなく、広く社会学や経営学や広告を学ぶような学部に入り、まちづくりについてと、デザインについて学びました。
その後盛岡に戻ってきて就職。営業職でした。とても忙しくもにぎやかで楽しい仕事を 4 年間していました。辞めたくないくらい本当に自分に向いていてすばらしい仕事だったのですが、残業が多く体力の必要な仕事でした。2021 年に『氷柱の声』で芥川賞候補になると、いよいよ作家業との両立は限界を迎えました。2022 年の 4 月に退職し、いまは作家として専業で仕事をしています。一本で食っていくぞ、と決めたというよりは、いまは作家としてのお仕事でぎりぎり食べて行けるようになったので集中するために会社を辞めました。好きな仕事だったので、いつでも会社員に戻りたい、とも思っています。ありがたいことに今年は連載もたくさんいただけて、本も 3 冊出すことができました、本当に毎日目まぐるしく働いています。

それでは、わたしが人生でどのように書くことと出会って来たかお話しします。
小学校のころから、担任の先生や両親に勧められて読書感想文や詩のコンクールに応募していました。小さな村に住んでいたこともあり競争率が低かったこともあって、すぐに佳作や優良賞を貰うことができました。運動も苦手で勉強もそこまでできるわけではなく、ピアノも辞めてしまって、自分には得意なことがないのかもしれないと思い始めていた頃だったので「わたしは作文が得意だ！もっとうまくなりたい！」と思うのは、当然の流れでした。
中学校では吹奏楽部に入って、作文コンテストなどに応募する機会は少し減りました。13 歳の時に母が地元の句会に誘われて俳句をはじめ、それに連れていかれる形でわたしも俳

句を始めました。国語の授業や受験対策で作文や小論文を書く機会があると、とても興奮しました。決められた題に対して何か文章を書く、ということにとても燃えるタイプだったのだと思います。高校は文芸部があるという理由で盛岡三高を受験しました。勉強があまり得意ではなかったわたしは猛勉強をして何とか入学しました。

高校に入ってからは、文芸部で部員たちと切磋琢磨しながら部誌を作り、作品を書きました。先輩だろうと仲のいい部員だろうと関係なく、よいと思ったこともよくないと思ったこともコメントしまくっていました。自分のとても気に入っていた部分に赤を入れられると（ぜんぜんわかってないなあ）といらいらして、言われた通りには直さなかったりしました。いまおもえば本当にわがままでうるさい後輩だったと思いますが、とても暖かく育ててくれた先輩たちと同級生たちと、のびのびと書かせてくれた顧問の先生にとても感謝しています。そのとき先輩が言っていた言葉で、いまでもわたしのお守りのような言葉になっているものがふたつあります。

ひとつは赤入れについてです。
「赤入れは、（なるほどな）と思ったら直して、（は？）と思ったら直さなくていい」
というものです。その赤入れが読んでくれた部員に言われたものでも、たとえ審査員から言われたものだったとしても、確かにそうかもしれないな、と納得したものだけ直して、なんでそんなこと言われなきゃいけないの、わかってないなあ、と思っているなら、直さない、というものです。
実際、作家になってからは校閲さんという仕事の人が原稿の事実確認や、より適切な助詞の提案、誤字などを指摘してくれます。時には文章の流れの中でこの表現が不適切なのではないか、という指摘をしてくれることもあります。作者はそれを言われるがまま直すことも、「ママ」として、そうだとしてもそのまま突き進むかを選ぶことができます。校閲さんの仕事は、そのワードチョイスのすべての可能性を示すことにあります。直すかどうか決めるのは、こちら、作者の仕事です。言われるとおりにすべて直すことが必ずしもその作品をよくするとは限りません。自分が最後まで舵を握って言葉の選択をするのです。

そしてもうひとつは「文芸部は 24 時間部活です」という言葉です。
わたしの頃は、部活は毎週二回部室に集まるというもので、逆に言うと毎日は部活動がなかったので、結構ゆるい部活だとみんなが思っていました。ところがその時の先輩、部長が、「文芸部は集まるのは週二日だけれど、それ以外の時間で作品のことを考えてしまうので事実上 24 時間毎日が部活だ」というのです。もちろん冗談で、わたしたちは笑っていたのですが、たしかに、作品を書くことに集中し始めると何を見ても「これに書けないか」「あれに書けないか」と思うようになってしまい、授業中も常に執筆用のノートを隠してそこに短歌を書いていたりしていたわたしは、間違いなく 24 時間部活をしていたと思います。

そしてわたしは恐ろしいことに、卒業してから十年以上たった今も、24 時間部活、のまま暮らしています。生活のすべてが、会話のすべてが、書かれるのを待っているかのように輝いて見えています。

そんなわけで文芸部の活動にのめりこみました。俳句と短歌と随筆を書くのが特に好きで、自由詩と小説はなかなか苦手でした。三年のときには文学研究以外の全ジャンルを書きました。小説と戯曲がとても大変でした。
今思えばすこし、作品で賞を取るということに固執しすぎていたようなところがありました。小学生の時からコンクールに応募して、賞に入っていると褒めてもらえる、という体験を重ねていたことと、元から負けず嫌いだったことが重なったのだと思います。
部活の同級生の中には「賞にはあまり興味がない、どうせ高校生らしいものは書けないから書きたいことを書けたらそれがいちばんいい。自分の作品は親にも友達にも読まれたくないし、本名でコンクールに出さなければいけないことも本当はいやだ」と言っている子もいました。わたしは全く逆で、「高校生らしいものを書いてなんぼ、賞を取ってなんぼ、自分の本名で書かれた作品を、親でもともだちでもとにかくたくさんの人に読んでもらって感想を貰いたい」と思っていました。
でもいまは、その子が言っていたことも守られるべきことだったと思います。作者と作品は切り離されて評価されるべきもので、作品が発表されようとするとき、本名や性別や顔写真を公表しなければいけないものではないと思います。筆名でなければ書けないこともたくさんあると思うからです。わたしは高校生の時に本名で作品を発表していましたが、筆名をつけるという選択肢はそもそもありませんでした。そのまま大学、社会人と活動していくにあたり、筆名をつけるタイミングを見失ってひらがなにしつつも本名で書くこととなりましたが、もし高校生の時に筆名をつけることができる、という選択肢があったなら、と思います。作品が、その人本人とあまりに紐づけられた状態で語られたり、評価されるような場は、本当に自由な創作ができる場なのかどうか、皆さんと一緒に、これからも考えたいと思います。

話がそれましたね。
高校生の時は、盛岡短歌甲子園に出場しました。その時初めて、全国に友人がたくさんできました。富山の高総文祭にも顔を出しましたが、正直あまりいい思い出はありません。「高校文芸」とわたしが呼んでいたものの輪郭はずっとぼんやりとして歪み続けていたような気がします。「高校文芸」はわたしよりもずっと本を読んで文学に精通している人たちが書いているのかもしれないと思う日もあれば、「高校文芸」はアニメとライトノベルの好きな人たちが書いているのかもしれないと思う日もあれば、同級生の書こうとしているサスペンスや SF のようなプロットを「高校文芸らしくない」と思う日もありました。わたしにとって「高校文芸」とは漠然と「純文学寄りの」「大人から褒められるような高校生らしさの

ある」「どこか実体験に基づいた」ものが評価されるものだと思っていました。だから、そういうものを書こうと思ってがんばっていました。

でも、いま思えば「高校生のわたしが書いたものはすべて高校文芸だったのかもしれない」と思います。高校生が書いていることが重要であって、必ずしも主人公が女子高生や男子高生である必要なんて、なかったのかもしれない。
そう思うと、高校生の、あの時のわたしが書きたかったもののすべてを本当に書けていたのか、わたしにはあまり自信がありません。書きたいと思う気持ちの少し手前に、審査員がどう思うか、を考えてしまっていたような気がします。わたしの作品では自分によく似た主人公が、自分によく似た主張をしていました。でも、あの子の書いた、サラリーマンのくたびれたおじさんが弁当を買いに行く小説は、高校生らしくなかったかもしれないけれど、わたしの作品よりもずっと、とてもすぐれたものだったのではないか、と、思うことがあるんです。

審査員の皆さん、というか、大人のみなさんにお願いできることがあるのだとすれば、「高校生らしい」を褒め言葉にするのをやめてあげてほしい、ということです。そして、いま高校生の皆さんにはあなたはいま「高校生らしい」ことが求められているわけではない、と言いたいです。大人の考えた「高校生らしさ」を演じ、無理に自分を曲げる必要はありません。「高校生のあなたがあなたの納得できる作品を書く」ことが重要なのだと言いたいです。
「高校生らしい」作品を書こうとし続けたわたしは、高校を卒業した後、どう書けばいいかわからなくなってしまいました。

わたしは結局全国コンクールで最優秀賞を取ることなく卒業しました。その頃にはもう、書くことの楽しさに溺れていて、書き続けたい、というよりも、書くことしかできない、とすら思っている自分がいました。それなのに、「高校生らしい」という看板を失った自分が、一体次に何を書けばいいのか、どこに応募すればいいのか、そしてそんな自分の状況をだれに相談していいのか、ちっともわからなくなってしまったのです。

大学に入って宮城県に移り住んでからのわたしは、いきなり何も書けなくなってしまいました。書けなくなった、というのは、応募するための作品を書けなくなったということで、ブログは書いていました。卒業直前まで岩手県内では受賞するたびに新聞にのったり、市の広報にのったりして、自分はちょっと有名なんじゃないかと完全に調子に乗っていました。仙台ではだれもわたしのことを「文芸部で賞を取っていた人」だと知らないし、そもそも「文芸部」という存在が、自分の思っていたよりもメジャーな存在ではないのかもしれないと気が付いてショックを受けました。
いざ小説の新人賞に応募してみようと思っても、高校文芸コンクールの規定の 30 枚以上の

小説を書いたことがないわたしには「70 枚以上 250 枚以下」なんて、とてもじゃないけどできるような気がしませんでした。どこに応募することもなくブログを書き続けて半年が経ったころ、ある人から「仙台にいるならこの人に会ってみたら？」と連絡がありました。それは、盛岡短歌甲子園で連絡先を交換していた福岡の一つ年上の友人でした。高校文芸コンクールという目標がなくなって何を書けばいいのかわからなくなってしまった、とブログを書いていたわたしを心配して連絡をくれたのです。短歌甲子園に出場していた秋田の友人が、いま東北大学で短歌サークルをやっているから、顔を出してみたらいいのではないか、と言ってくれて、それでようやく、書き続けるための場と出会うことができたのです。つまりわたしは、高校時代の文芸部の縁に救われました。「書く」という共通点のある同世代とは、他校であっても積極的に連絡先を交換して繋がっておくことも非常に大事なことだと思います。

それからの大学生活は、短歌と俳句にのめりこむ日々でした。短歌や俳句を通じて全国にたくさんの友人ができました。ライバルがいるのはとても豊かなことだと実感しました。どういう出版社があって、どういう賞があるのか情報収集するのも、ひとりで困っていた時よりずいぶん簡単になりました。そうして新人賞に応募したり、歌会や句会を重ねたりしているうちに、ウェブマガジンや同人誌で短いコラムを書いてみないかと声を掛けてもらえるようになりました。そして、大学四年生の春、「ウェブマガジンで 6 月の一か月間、俳句とエッセイの連載を担当してくれないか」と声がかかったのです。原稿料はありませんでした。それでも、書いたものがたくさんの人の目に触れると思っただけでうれしくてたまりませんでした。連載のためには 30 本書き溜めなければいけなかったのですが、丸三日で書き終えました。わたしには書きたいことがたくさんあったのに、書く場がなかったのだとわかりました。

そうして『わたしを空腹にしないほうがいい』という連載が始まりました。更新がはじまるとフェイスブックやツイッターで少しずつ話題になり、ぜひ冊子にしてほしい、という声が多くなりました。自費で何万円も出さなければいけないのは苦しかったけれど、思い切って冊子にしました。大きさは A5 の、ページの少ないぺらぺらの本でした。200 冊作りました。それを手売りして、余った分は、本屋さんや雑貨屋さんに持って行って売ってもらうことはできないか、と相談しました。そのうちの一つの本屋さんが「これはすばらしいから、もっとたくさんの人に手に取ってもらえるように、うちで文庫版にしないか」と言ってくれました。それが BOOKNERD という盛岡市の本屋さんです。大きな出版社ではありませんし、ひとりでやっているちいさな本屋です。それでも、お店の経営をかけてでも、この本を出したいと言ってくれました。『わたしを空腹にしないほうがいい』という本は文庫本になり、全国のリトルプレスを扱っている書店を中心にお店においてもらえることになりました。バーコードのついた本ではないので大きな流通には乗りません。だから Amazon にも紀伊

国屋にもジュンク堂にも TSUTAYA にも売られていない本でした。でも、次第に、じわじわと売れました。全国の独立系書店と呼ばれる小さな書店が、たくさん売ってくれたんです。その本を手に取ってくれたのが、マガジンハウス社の POPEYE という雑誌のライターさんでした。そして、大きな出会い、講談社群像の編集長でした。

そうしてわたしは新人賞を取ることがないまま、原稿料をいただいて、商業誌で連載をすることになりました。遅くまで仕事をして、それから帰宅して原稿を書く日々が四年間続きました。仕事の休憩の一時間で原稿をどれだけ書けるかが勝負、という日もありました。
小説は高校文芸コンクールのための、30 枚のもの一作しか書いたことがなかったのですが、講談社群像チームのみなさんに育てていただき、小説を書き始めるようになりました。初めて書いた 120 枚くらいの中編小説がいきなり芥川賞候補になりました。児童文学を書くのも大好きだったわたしは、絵本の出版社ともご縁ができて、絵本も出しました。わたしを空腹にしないほうがいい、という本を文庫本で出したのが 2018 年。そこから 5 年で、エッセイ集を 4 冊、小説を 1 冊、児童向けを 2 冊、歌集を 2 冊、出しました。さすがに仕事と執筆の両立が厳しくなり体調を崩したことと、会社員をしていたら引き受けられないような大きな仕事が増えてきたこともあって、仕事を辞めました。いま、わたしはいよいよ作家になった、と言える状況だと思います。小説家、でも、エッセイスト、でも、歌人、でも、絵本作家、でもなく、すべてのジャンルで書き続けているという点では、ほかの作家とは少し違っています。マルチですごいですね、と言われることも多いです。でも、「文芸部をずっとそのままひとりで続けている」と思えば、皆さんにはわかってもらえるんじゃないか、とも思います。

「高校文芸から作家になる」と今日の演題にはありますが、「作家になる」という定義にも、さまざまあると思います。商業出版で原稿料を収入にする作家であっても、自分でお金を出して同人誌や ZINE を発表する作家であっても、書き続けている人のことを「作家」と呼ぶことには変わりないような気がします。「作家」にも、いろいろあります。もしあなたが「作家」になりたいと少しでも思うならば、その「作家」が「作家」として収入を得ることなのかどうかは、よく考えてみるとよいと思います。
きょうは原稿料を貰って作品を書き、それを収入とする「作家」としてお話をしますね。

作家のなり方としていちばんオーソドックスなのは「なんらかの賞を受賞する」というものだと思います。実際周りの作家もほとんどがそうです。けれど、ZINE と呼ばれる冊子がブームになって、少部数の印刷に長けた印刷所もたくさんある現代、作家のなり方はひとつだけではないと思います。本としてだれかの目に留まる、という手段でも、わたしのように作家になることもあります。わたしの場合は、卒業後も書き続けながら、わたしを作家にしてくれる人と出会う可能性を広げ続けたことが、作家になることのできた理由だと思ってい

ます。
ただ、いまでもわたしは「賞をとっていない」ということがコンプレックスの一つでもあります。だから、新人賞に応募する、というのもとても大切なことだと思います。

「作家」＝「とても才能があるひと」
だと思っている人も多いと思いますが、実際は、もちろん才能的なものも必要かもしれませんが、それ以上に、社会人としてのスキルをきちんと持っていることが重要な仕事だと思います。おれ社会不適合者だから作家にでもなろうかな、なんて冗談交じりに言う人が、たまーにいます。でも、いま、作家として仕事をしている人のほとんどは、会社員だとしてもとても仕事ができそうなひとばかりです。作家として作品を公表している人の中にも、別の仕事で収入を得ている人も多いです。公表していないだけで、今みなさんが「作家」一本で食べているだろうと思うくらい書いている人のうちにも、実は本業は別にある人もいます。

作家は印税で高収入、だからとても狭き門、というイメージの人も多いかもしれませんが、実際は狭き門だとしても、収入はなかなか厳しいと思います。まずは、本になるまでが大仕事です。わざととても単純にしてみると、たとえば文芸誌の原稿用紙一枚の原稿料が 4000 円だとします。もしあなたが月収 20 万円欲しいと思っているのだとすれば、まずは毎月 50 枚、世に出すことができる作品を書けるのかどうか、そういう仕事を貰えるかどうか、ということになります。そしてそれを、毎月継続できるかどうか。

いざ原稿料を貰えるような話がたくさん来たとしても、原稿を期日にしっかり出すことができるか、出せないときに前もって連絡をすることができるか。そういう、いま皆さんが学校で課題を期日までに終えたり、出せと言われた書類をちゃんと出すことができるか、みたいな、面倒くさいことは、実は作家になっても続きます。だから、締め切りを守る、時間を守る、書類をちゃんと読む、ということには、高校生の時からしっかり向き合っておくべきだった、といまわたしは後悔しています。
たとえば、編集者からの企画書をしっかり読んで、自分が参加するべきものを見極めることができるかどうか、難しい仕事は断ったり、原稿料をもう少し上げられないか交渉することができるか。そしてさらに、自分の書き終えた原稿の請求書を出して、確定申告のための書類を揃えたり、ゲラを印刷したコピー用紙が切れたら、それを買いに行って経費として計上しなければいけません。作家の仕事は、書けない書けない、ウーンと唸ったり、うおーっと書き進めたりするかっこよさげな「執筆」だけではありません。実際は執筆以外にたくさんの複雑なコミュニケーションと、たくさんの雑務に囲まれています。それらはどれも、社会人として必要なスキルがないと、なかなか難しい仕事だとわたしは思います。

高校生の時にフリーの編集者をしている人と話をする機会がありました。その時に「工藤さ

ん、間違っても作家になりたいから就職しないなんて言っちゃいけないよ、一年に 4 冊本が出せるようになって初めて、職業作家として食べて行けるようになると思ってね」と言われました。その時は、そんなのありえない、絶対に無理だ、このひとは脅そうとしてそんなことを言っているんじゃないか、と思いましたが、実際はそのくらい書き続けることができる人でないと難しい、という意味では、むやみにその編集者がわたしを脅そうとしていたわけではなかったなあ、と思います。

だからわたしは、もしいま目の前に皆さんと同じくらいの年齢の人が来て「作家になるか、就職するか悩んでいます」と言われたとしたら、まずは就職をすることをお勧めすると思います。就職しながらでも書き続けるくらいの体力がある人でないと、作家になることができたとしても続かないだろう、という、体力面の問題も勿論あります。ただ、それ以上に作家として仕事をしているいま、会社員として 4 年間働いていてよかったなあと思うことばかりだからです。さっき話したような、ビジネスメールを書く力や、だれかと交渉をしたりする力、できないことをできないと言う力、書類を書くことに慣れる力、期限を守る力は、やはり会社員だったからこそ、身についた部分も大いにありました。
また、作家として作品を書く以上、実際の世の中のことを知っていたほうが有利に働くことは多いです。会社員として仕事をしていれば、会社員を登場人物とした小説を書くときに、よりリアルな描写ができます。会社員として経験した人間関係や、会話や、雑務や、飲み会。そのいいことも悪いことも、すべてが作品の糧になる日が必ず来ます。作家を仕事にすると一人の時間も多く、社会とかかわる時間も減ります。人生において「他者とコミュニケーションを取る」という、予想外なものと関わってしか得られないインプットが、会社員の人たちに比べて激減するという現状もあります。
それに、実際執筆をするうえで「これが書けなかったら家賃が払えない」と思うことと、別の安定した収入があって「家賃はどちらにしても払える」と安心しながら書けることの精神的な余裕は全然違います。
だから、就職するか、作家になるか、ではなくて、就職しながら書き続けて、働き続けるのが難しくなるくらい作家の仕事が増えたら作家を仕事にする、というのがいちばんよいとわたしは思っています。

繰り返しになりますが、作家になるためには、とにかく書き続け、出会い続けることがわたしにとっては非常に大切なことでした。なにか書きたいと思うことがあったときに、それを文章にし続けること、それを見てくれる人を作り、フィードバッグを得続けること、読者やライバルと出会い続けることが、わたしを作家にしたのだと思っています。

そして、その「書き続けたいとおもう力」と、同世代のライバルと出会うための機会をくれ

たものこそが、間違いなく「高校文芸」という場であり、「文芸部」という部活であったと思っています。高校文芸に育てられたからこそ、いま、作家という人生を歩んでいるとそう思います。
「高校生らしさ」に囚われていたことは、卒業後たしかに足枷になったこともありました。しかし、原稿料を貰って執筆するときに「審査員や読者を意識して書く」「決められた枚数で書く」力はどっちみち必要で、その力をつけることができたのは、間違いなく高校生の時に全国文芸コンクールに応募し続けたからだと思っています。書くことに熱意を燃やす高校生たちを応援し続ける「全国高校生文芸コンクール」という場は、本当にありがたいものだと思います。この授賞式や、この賞の選考のためにたくさんの時間を使った先生方や大人がたくさんいます。その事実は、書き手としての高校生の皆さんを育むために非常に豊かなことだ、と思います。

ただ、あなたが取り組むことのできる賞はこの「全国高校生文芸コンクール」だけではない、ということも、知っていてほしいです。このコンクールで賞が取れなかったから、書き続けることには向いていないのだろう、なんて、絶対に思う必要はありません。各文芸誌の新人賞や、俳句や短歌や現代詩の各ジャンルの新人賞や、さまざまな雑誌や出版社や、編集者たちが、卒業後もあなたのことを待っています。
そして、コンクールや賞は、あなたを評価するためにあるものではありません。きょうのこの賞に限らず、すべての賞は、書き続けようとする背中を押すためにだけあるものです。思うように賞を取れなかったとしても、その審査員たちと、その時のあなたの作品がマッチしなかった、というだけで、あなたの書くものがよくなかった、という意味ではありません。
わたしはかつて、賞を取ることや一位を取ることに躍起になっていた高校時代に、おじいちゃんのように優しかった俳句の先生にこう言われたことがあります。
「れいんちゃんは、一位を取ったらもういいやって辞めちゃいそうだから、書き続けてほしいっていう神様がちょっといじわるしたんだろうね。賞っていうのは、いま一位を取らないと辞めちゃいそうな人のためにあって、一位を取れなかった人は、一位じゃなくったって書き続けられそうな人だってことなんだよ」と。きっと精一杯の励ましの言葉だったのだと思います。その言葉が最後の言葉になって、先生は亡くなってしまったのですが、それからもずっとその言葉を思い出して励みにしています。

それからは、「わたしよりいい賞を取った人」のことも「書き続けるために１位を貰った人」だと思えるようになり、受賞を逃した自分のことも、「1 位じゃなくたって書き続けられるからだ」と、ちょっとだけ思えるようになりました。少なくとも受賞した人の作品が「良い」もので、受賞できなかった自分が「だめ」だったのだと思うことは随分減りました。

これは、自分に対して言っていることでもあるのですが、懲りずに書き続ければ、そして、

閉じこもらずに出会い続けようとさえすれば、あなたが納得できる日が必ず用意されています。あなたの作品を読み続けたいという人は、必ず現れます。わたしはこころからそう思います。

ただ、ここまで言っておきながら、わたしはみなさんに「だからこれからも、書き続けてください」とは言いません。
十代の頃は特に、作品を書いていると、大人たちから「書き続けてください」と言われると思います。わたしも高校生の時はよくそんな風に言われました。期待されているようでうれしい言葉でもありました。でも、その言葉が呪いになる日もあるって、わたしは知っています。書けない自分はダメな自分なんじゃないか、と、思うときもありますよね。わたしはいまでもそんな日ばっかりです。書くことができるあなたはすばらしいけれど、書かなくなったってあなたは十分すばらしいと、ちゃんと大きな声で言いたいです。

書き続けるかどうかは、あなたがその時その時の自分で決めることで、決めていいことです。でも、これからさきもしあなたに（書きたい）と思うときがきたら、そのときその（書きたい）と思う自分を逃さないことを大切にしてもらえたらいいと思います。

この中には、作家になることを夢見ている方がいるんじゃないかと思います。あるいは、ここまでわたしの話を聞いたとしても、もう結構あきらめている人も多いんじゃないかと思います。それに、もしかすると卒業したらもう作品を書いたりするのはいいかな、やめようかな、と思っている人もいると思います。正直、それでいいと思います。というのも、作家を目指すかどうかは作家になるためにはあまり重要ではないような気がしているからです。実際、作家を職業として働くようになってから、作家というひとは「作家になりたいひと」よりもずっと「書きたいものがあって、それを書くことができるひと」な気がしています。「作家になりたいひと」よりも「書くことをやめられないひと」のほうが、作家に向いているように思えるのです。

重要なのは、今後皆さんが卒業して、コンクールという目標を見失った後のこと。（何か書こうかな）と思ったときに、まずその一文目を書けるあなたでいてほしい、ということです。まだあまり現実的には想像ができないかもしれませんが、大学へ進学したり、就職したりすると、いまよりももっと、一日があっという間に過ぎて、家に帰ったら夕飯を食べて眠るだけ、という日が多くなったりします。「書きたい」という意欲が湧くことが少なくなったり、書きたいことがあってもへとへとで書き出すことができないまま日々が進んでいったりするのです。その時に、でも、ちょっとだけでも、と、パソコンを立ち上げたり、スマホにメモしたり、手帳に書いたりできる人が、多くなったらいいな、とわたしは思います。

なぜなら、書く、という行為は、やっぱりとても楽しくて仕方がないからです。生活の中に「書く」というコマンドを持っている人は、ものの見方がぐっと、解像度の高いものになると信じているからです。あなたの見たものを、あなたのように書くことは、あなたしかできません。そのうっとりとするような、あるいは途方に暮れるような事実を抱きしめて、何か書きたいときに、あなたがそれを書くことができる人生であればいいなあ、と、わたしは思います。そしてその時、その作品を読んでくれる人や、その作品をより良いものとして届けようとする人と出会ったときに、あなたは作家になるのだと思います。

作家になるって、とってもたのしいことです。書くことって、やっぱり、ものすごくたのしいことです。みなさんには書くことのわくわくするような高揚感をいつでも思い出すことができる日々を歩んでもらえたら、と思います。

そしてなによりも、いま、高校生のあなたが書くことで何かを表現しようとしている。それだけでとても美しく、素晴らしいことだと思います。たとえこの先書くことを選ばない人生だとしても、この三年間は皆さんにとって間違いなくかけがえのない時間だったと、十年、二十年、三十年経った後にきっと眩しくなります。

最後に。
いま、書きたいことがあるならば、いま、書いてください。
高校生らしさなんて、高校生ではなくなった人が懐かしむために言う言葉で、
いま高校生のあなたを縛るための言葉ではありません。
あなたがいま書きたいと思うことを、きっとだれよりも、あなた自身が読みたいはずです。
あなたが読みたいものを、あなたが書いてください。

以上です、ご清聴ありがとうございました。